

クスノキ

なでしこに かかる涙や 楠の露

芭蕉

芭蕉にしては稚拙にも見える句だが、実はこの句は前置きに「正成之像 鉄肝石心此人之情」とあるように、楠木正成を偲んだものである。心ならずも足利尊氏の大軍勢と刀を交えることになった正成が、11歳の嫡子・正行を呼んだ。今生の別れになるかも知れない、汝は生き延びて、いずれ朝敵を撃てと涙ながらに諭し、天皇から賜った刀を授ける場面である。この故事は戦前の教科書には必ず載り、「桜井の訣別」という唱歌にもなった。桜井駅跡の石碑には乃木将軍が「楠公父子訣別之所」と自筆でしたため、正成終焉の地・湊川にある墓石には水戸光圀が「嗚呼忠臣楠子之墓」と記している。まだ尊王思想が台頭しない頃であるが、芭蕉も鉄石のように堅い正成の忠義に感応したのである。

クスノキはいかにも堅固な樹木である。伊奘諾尊の時代に既に楠で作った船が登場する。また飛鳥時代の木彫仏の用材はほとんどクスノキである。このクスノキが『大同類聚方』では医薬品として用いられている。クスノキ、オケラネ、ヒクチ(硫黄)を燻すと狐つきの病が治るといふ。なるほどクスノキの樟脳を嗅がせればキツネも逃げるだろう。樟脳は防虫剤であるとともに、カンフル剤の原材料でもある。

平成25年の鹿児島での日本東洋医学会学術総会に参加したとき、「蒲生の大クス」に立ち寄った。樹高30m、根回り33.57m、目通り幹回り24.22mの日本一の巨樹である。樹齢は1500年。伝説によれば、和氣清麻呂が宇佐八幡の神託を奏上したため、大隅に流されたときに蒲生を訪れて、手にした杖を大地に刺したところ、それが根付いて成長したのがこの大クスであるという。神護景雲3(769)年、女性天皇の称徳天皇(孝謙天皇)の信任を受けた道鏡が皇位に付こうとした際、和氣清麻呂が宇佐八幡の「天つ日嗣は必ず皇緒を続けよ」との神託を受けて道鏡の野望をくじいたのである。皇統が途絶える危機であった。その宇佐神宮の本殿前にもご神木としての楠の木がある。

楠木正成が仕えた後醍醐天皇のときもそうであったが、上皇や院政のように、現天皇と前天皇が併存しているときには、必ず世は乱れる。明治時代、皇室典範を制定したときにも、その危惧があったために、生前退位を認めなかったのである。その皇室典範に関し、今年3月、国連の女子差別撤廃委員会が「皇室典範の改正を求める」内政干渉とも言える勧告を出した。国連もいよいよ怪しくなってきた。外務事務次官、国連大使、国際司法裁判所所長にまで上り詰めた官僚が、中曽根内閣のとき「日本の外交は、東京裁判を背負っているハンディキャップ外交である」と卑屈な答弁をしている。GHQが作成したWGIP(War Guilt Information Program: 戦争についての罪悪感を日本人の心に植え付けるための宣伝計画)に外務官僚まで毒されていたのである。与党幹部の女性天皇容認発言、天皇生前退位の一連の報道を見ると、道鏡的なものが皇室を始め日本全体を侵食しつつあるように思える。

筆者は為政者を「真善美」に分類すると、善なるものが適任かと思う。清濁併せ飲む器量を持ち、庶民にとって善いことを即断即決できる為政者である。真理を追求する学者肌の為政者は、現実を見る目が弱いので失敗する。吉田茂に「曲学阿世の徒」と罵られた東大総長が為政者だったら、今の日本はなかった。美醜にこだわる芸術家肌の者が為政者になると、差別によって悲惨な状況を齎す。ヒトラーは画家のまま終われば良かったのである。楠木正成や和氣清麻呂も男の美学に殉じたが、国のリーダーには成らなかった分、日本人の心の琴線に触れ続けている。ただ現代の道鏡と対峙するには、彼らの力が必要である。キツネを追いやる樟脳として。そしてWGIPに洗脳された頭を覚醒するカンフル剤として。

(山人)



